子づくり婚は
幼馴染の御曹司と

葉嶋ナノハ
Nanoha Hashima

Eternity
BUNKO

目次

子づくり婚は幼馴染の御曹司と　5
俺の愛に気づけよ　307
書き下ろし番外編
愛しい毎日　325

子づくり婚は幼馴染の御曹司と

「はぁ〜〜、クリスマス直前にフラれるとか、最悪なんだけど……」
八雲小百合は薄いグラスを掲げ、日本酒をぐいと飲んだ。
「私の身長があと十センチ低かったら、フラれなかったのかなぁ。こういうパターン、何度目だろ？」
「そろそろやめとけって。飲みすぎだぞ」
ため息を吐きながら徳利に伸ばした手を、正面から制される。
「明日は休みだし、理生が一緒だから安心して飲んでるの」
「そりゃどうも。ていうか、俺のことそんなに信用してるんだ？」
小百合の相手をしている幼馴染の寺島理生が呆れ声で言った。
彼は幼稚園、小学校の同級生だ。中学、高校と一度疎遠になったが再会した大学で意気投合し、社会人になってもこうしてよく会っている。
「昔からの付き合いだもの。理生のことは信用してる。他の人とだったらこんなに飲まないし、醜態もさらしません」
「まぁ、誰にも見られない個室だしな。酔いまくっても、どうせ俺が送っていくしな」
「……ありがと。いつもごめん」
小百合がしゅんとすると、日本酒を手にした理生が苦笑した。
「いいよ。俺も小百合と飲むの、楽しいから」
「私も楽しい。でも、こんなに豪華なところばかりはちょっと困るよ。割り勘にもさせてくれないんだもの」
小百合は誘われた料亭の個室内を見回す。
床の間のある清潔な八畳の和室に二席だけという贅沢さ。隅に置かれた間接照明が部屋を上品に照らしている。美しい空間に素晴らしい食事――
できたばかりの恋人にフラれた小百合のために、「慰めてやるか」と理生が用意してくれた場所だ。
こういった「慰めの会」は何度目だろうか。
社会人一年目に当時の恋人にフラれた時から、理生とふたりで飲み始めた記憶がある。
小百合は背が高いことにコンプレックスを持っていた。
昨今、女性の百七十六センチという身長は珍しくもなさそうだが、彼女にとってはネガティブな要素が大きく、特に男性関係においては顕著だった。

フラれた理由で過去に一番傷ついたのは、体の相性が悪いと指摘されたこと。自分とたいして変わらない身長の体を相手にするのはしんどいだとか、そもそもその気になりにくいだとか、挙げ句の果てには、小柄の女性のほうが好みだとはっきりわかった、などと言われてしまった。

そして今回は婚活で出会った相手。深い関係になる前に別れたのは不幸中の幸いかもしれないが、去られた理由が「隣を歩くと背丈が一緒で恥ずかしいから」だったので、またかと落ち込んでいる。

とにかく、その前も、さらにその前も、フラれた時は理生が慰めてくれた。次の恋に向かうまでの期間、彼は素晴らしい場所ばかりを選び、遊びや食事に連れていってくれたのだ。

それができたのは理生が大企業の御曹司であり、セレブな人種だからだろう。

「店を決めてるのは俺なんだ。金のことは気にしなくていい。誘いづらくなるから、そういう遠慮はやめてくれ」

理生は小百合の言葉を聞いて、不満げな顔をする。

「本当に？」

「本当。俺も、小百合が相手だと気兼ねなく飲めていいんだ。だからお互い気を遣うのはなし。いいな？」

「わかった。じゃあ、これからもよろしくお願いします」

理生はセレブではあるが、小百合が誘う居酒屋にも気軽に付き合い楽しんだ。何の話でも盛り上がるし盛り上げてくれるから、彼といると居心地が良くてつい時間が経つのを忘れてしまう。理生にとっても小百合はそういう存在なのだろう。

（そういえば、この二年くらい恋人がいないみたいだけど、どうしてなんだろう？　理生なら、よりどりみどりなのは間違いないのに）

疑問に思った時、個室の扉をノックされた。小百合はとっさに居住まいを正す。

「お待たせいたしました」

入ってきた仲居が、鴨葱の陶板焼きと蕎麦を座卓に並べた。茶蕎麦、十割蕎麦、変わり種のバジル蕎麦が、それぞれ小鉢に可愛らしく盛られている。

「ここの蕎麦、美味いんだよ」

「美味しそう～……！」

ごゆっくりどうぞ、と仲居が出ていき、再びふたりだけの空間になる。

小百合は蕎麦を啜ったあと、目の前で同じく蕎麦を頬張る理生を改めて観察した。

たぶん、誰がどう見ても理生はイケメンの部類に入る。実際、大学の時はかなりモテていた。彼の恋人遍歴はだいたい知っている。みんな美人で人気のあった女性だ。

理生の身長は百八十八センチ。小百合より十センチ以上高い。手足が長く、細身に見

えてしっかりした体躯は、上着を脱ぐと男らしさを感じさせた。
（見慣れちゃったから普段は忘れてるけど、本当にイイ顔してる）
きりりとした大きな目、通った鼻筋、大きめの口が野性的なところも魅力的だ。ビジュアルの良さは百点満点だろう。
（それに加えて性格は明るくてノリがいいし、誰にでも優しくて、私の面倒まで見てくれるイイ奴なのよ。これでモテないほうがおかしいでしょ。まぁ、たまに意地悪なことは言うけど……）
客観的に見れば本当に素敵な男性である。だが、幼い頃から知っているせいか、小百合の恋愛対象にはならなかった。彼もまた同様で、小百合が恋愛対象になることはない。
何でも気兼ねなく話せて、愚痴を言い、聞き役に回り、バカ話をして笑い、楽しい時間を共有できる大切な友人。それが小百合と理生の関係だ。
（大切な友人だからこそ、理生には幸せになってほしいと思ってる。面と向かってそれを伝えるのは照れ臭いけどね）
香ばしく焼けた鴨肉を口に入れる小百合に、理生が言った。
「お前さ、『これからもよろしくお願いします』って、また懲りずにフラれるつもりなのか？」
「ちょっ、好きでフラれてるわけじゃないわよ、失礼な！」

鴨肉をもぐもぐ噛みながら抗議する。
「身長のことは気にしなくていい。小百合はモデル並みにスタイルがいいんだから」
「理生だけよ、そんなふうに言ってくれるの。理生は背が高いから、気にしないでいてくれるもんね。でも、私と同じくらいの身長の男性からするとダメみたい」
「身体的なことを相手に求める男は、自分に自信がないんだろ。小百合は何も悪くないよ」
きっぱりと言ってくれた理生の言葉で、心が慰められた。
「……ありがと。理生がやめておけって忠告してくれたのに、私が中途半端な気持ちでいたのがいけなかったのよね、きっと」
「やめて良かっただろ、あんな男」
「結婚するには良い人だと思ったの。年収も十分あって優しそうだったし……」
「でもケチ臭かったじゃん」
「そ、それは結婚する前提だったから、お金にうるさかったのよ」
言い訳じみたことを口にしながら、結婚相手と考えていた彼の行動を思い出す。
「初デートで『ふつーの蕎麦屋』に行って、ワリカンのうえに端数は小百合持ちだったんだろ？」
「うん、まぁ……。細かいお金がなかったのかなって」
「カードで払えよ、そんなもん。その次のデートは牛丼屋に行って終わり。その後もデー

トらしいデートなんてしてなかったよな」
「よく覚えてるわね。理生って記憶力がいいよね」
感心していると、理生が腹立たしげな表情をあらわにした。
「先月の小百合の誕生日だって祝わなかった。どこまでケチなんだよ」
「それは……。まだ付き合い始めたばかりだったししょうがないよ。あ、あの時はありがとう。理生が誘ってくれたテーマパーク楽しかったね」
「ああ、また行こうな。って、いやそれは別にいいんだよ、とにかくだな――」
「お金の価値観以外は結婚してもいいかなって思えたのよね。好きなドラマとか映画も似てて」
「そんなもん、俺だって小百合と好み一緒じゃん。小百合の友だちだって同じじゃないか」
「と、とにかく、婚活で結婚話が進んだのはその人だけだったんだもの。いいと思ったのよ」
小百合はバジル蕎麦をつゆにつけ、ひとくち啜った。爽やかな風味が口に広がり、意外な美味しさに驚く。
「身長がどうのの前に、小百合の『結婚したい！　誰でもいいから！　早く！』っていう焦りが相手に伝わってるんじゃないか？　それに怖じ気づいた男が、身長を理由にして去っていく……。あると思うな、俺は」

理生は鴨葱を日本酒のアテにして食べ、美味しいと言っては飲む、を繰り返している。
そんな理生を見つめて、小百合は小さく息を吐いた。
「もう二十八歳だもの……焦るわよ。世間じゃ、結婚したくない二十代だの、おひとりさまが流行ってるだの言われてるけど、あんなの嘘」
「嘘って？」
理生が残りの蕎麦を啜る。彼は気持ちいいくらいの食べっぷりなので、小百合も一緒に結構な量をたいらげてしまう。それもまた楽しいのだが。
「私の周りはみんな恋人いるし、っていうか恋人どころか半数以上結婚して子どももいる。後輩も結婚し始めて……。とにかくね、現実はこんなものなのよ」
「まぁ……、男はまだしも、女性はそういうことを気にする年齢かもな」
理生はおちょこを口にして、うんうんとうなずいた。
「でしょ？　ほら、夏に夕子の結婚式、理生も一緒に出たじゃない。あ、春には富井くんの結婚式も」
「ああ、そういえばそうだった」
「だから焦るな、なんて安易に言わないでほしいわけ。……私ね、夢があるの」
理生と話しているうちに、気持ちが落ち着いた自分に気づく。
冷静になってみれば、自分をフッた相手に対してそれほど恋愛感情があったわけでは

ない。理生に言われたとおり、結婚というものに焦っていただけなのだろう。
「知ってる。子どもは三人以上産みたい、金銭的に余裕があれば五人は欲しい、戸建てに家族でわいわい賑やかに暮らしたい……だろ？」
座椅子の背にもたれ、くつろいだ体勢で理生が答えた。
「正解！　よくそんなに詳しく覚えてるわね～、やっぱり記憶力がいい！」
「まぁな」
ふふんと鼻で笑う彼に、小百合は苦笑する。
「そんなの、夢のまた夢だってわかってる。このあたりで戸建てを持つなんて私の歳じゃ到底無理。だからせめて早く子どもを産みたいと思って……」
何だかんだ、自分の欲を優先していただけ。そんな思惑を感じ取った相手が去るのは、当然かもしれない。
「何かもう、恋だの愛だのは面倒臭い、どうでもいいってなっちゃった。理生が慰めてくれたけど、身長のコンプレックスはなくなりそうにないし」
最終目標は「たくさん子どもが欲しい」なのだ。その過程にしがみついても意味がないと、ようやく理解する。
「だからもう、恋愛すっ飛ばして結婚だけしたーい！　なんてね――」
「じゃあ俺と結婚すれば？」

理生が言った。聞き間違いかと思うほど、さらりとした言い方で。
「……え？」
「親同士も知り合いだし、面倒なことは一切ないだろ」
「ちょ、ちょっと冗談がすぎるでしょ、何言ってんの」
「冗談でこんなこと言わないって」
珍しく真剣な表情でこちらを見るから、小百合の心臓がドキリと音を立て、無意識に顔が熱くなる。
確かに理生は冗談で大切なことは言わない。
ということは――
「もしかして何かあったの？　悩みがあるなら言って？　親友なんだから」
小百合が身を乗り出すと、彼はさっと視線を逸らした。
「親に結婚しろって、うるさくせっつかれてるんだよ。でも、親が決めた相手は絶対にイヤだ」
「何でイヤなの？　あんた御曹司なんだから、お相手はすごい女性ばっかりなんでしょう？　理生と同じ立場のお嬢様、親が俳優のモデル、あとは……女優？　アナウンサー？　よりどりみどりじゃないの」
理生は口をつぐみ、まだ視線を正面に向けずにいる。

「会ってみればいいのに。すごく可愛くていい人かもしれないよ？　今時、政略結婚を決めようとする女性なんて、真面目で心意気があっていいと思うけどなぁ」
「小百合ってお人好しだよな。そんなんだから、ろくな男が寄ってこないんだよ」
「わ、私の話じゃないでしょ。理生の結婚の話を――」
「だから俺は小百合と結婚する。お前にとっても優良物件だろ、俺」
上目遣いで問われ、今度は小百合が目を逸らしてしまった。
（何で私、ドキドキしてるの？　結婚って言葉に弱いから？　というか、理生がいつになく素敵に見えたのはどういうこと？）
動揺を鎮（しず）めるためにコホンと咳払（せきばら）いし、姿勢を正す。
「そりゃまぁ、優良物件だろうけど……。でも、私と結婚したって理生にはメリットがないじゃない」
「いやありすぎるだろ。幼馴染だから気心が知れてる。親同士の仲がいいからこの結婚を喜ぶに決まってる。小百合は変にセレブに染まってない。俺にとってはいい条件ばかりだ」
「なるほど……」
そういう考え方もあるのかと妙に感心していると、理生がニヤリと笑った。
「俺と結婚したら、子どもは何人産んでくれてもかまわない。もちろん育児は協力する。

その上でシッターをつけて小百合の負担を減らそう」
「なっ、何人でも!?」
嬉しい提案に、小百合は思わず立ち上がりそうになる。
「そう、何人でもオーケー。俺の仕事的にも、子どもは大歓迎だからな」
「ああ、確かにそうよね。忘れてたわ」
理生が勤めているのは「テラシマ・ベイビー株式会社」という、マタニティ、赤ちゃん、キッズ用品を取り扱っている大企業だ。
品物が購入できるだけでなく、マタニティママのコミュニティや習い事、幼児教室などの運営もしており、これらはすべてオンライン上でも行える。また様々なイベントを開催していて、そちらも盛況だ。この業界では頭ひとつ抜きん出ている会社である。
海外への輸出においては、品質の良い日本製品が受け、国内の少子化による消費の縮小も避けられていた。ＳＤＧｓに対する取り組みも積極的だ。
（そんな完璧な企業の社長が理生のお父さん。理生がその会社を継ぐことは決まっていて、仕事に邁進（まいしんちゅう）中。理生は真面目でよく働くのよね……）
などと、酔った頭で考えていると、彼がおちょこを掲げる。
「小百合が続けたいなら、今の仕事を辞めなくていい。育児同様、お互いに忙しい時は家事を外注に頼ろう」

「でも御曹司の奥さんなんて、お付き合いが大変そう」
「最近は奥さん同伴のパーティーや会食は滅多にないよ。起業家も独身者が増えてるんで」
「へえ、そうなんだ」
「な、条件いいだろ？　それに俺の隣なら身長は目立たない。まぁ、そもそも俺はそんなこと気にしないって、さっきも小百合が言ったとおりだしな」
理生が日本酒を飲み干し、こちらを見て笑った。
確かに条件は最高だ。小百合の夢が叶うのは目に見えている。親同士も喜びそうだ。
「理生と結婚ねぇ……。うん、まぁ、そういうのも良いかもね」
つい、そんな返事をこぼす。
「よし決まり。じゃあ、そろそろ出ようか」
「えっ、あ、そうね。もうこんな時間？　ありがとう、いろいろ愚痴聞いてもらっちゃって」
「いえいえ。有意義な時間だったよ。美味かったしな」
「本当ね。すごく美味しかった」
慌ただしくその場を出ることになり、小百合も急いで身支度をする。
理生は今夜も、彼女には支払わせてくれない。
「ごちそうさまでした。でも、私から誘いにくくなるから、今度は絶対に払わせてね」

店を出て、路地に入ったところで小百合はお願いした。
きんと冷たい空気にさらされた頬が、日本酒で火照（ほて）った熱を一気に冷ます。寒さに縮こまった小百合の肩を、理生が抱き寄せた。
「っ!?」
唐突な彼の行動に絶句して顔を上げる。視線が合った理生が、ニッと笑った。
「じゃあ次はクリスマスな。そこでごちそうしてもらうよ」
「……わかった。予約が取れるかわからないけど、探しておくね」
過剰に反応するのもおかしい気がして、平静を装（よそお）って返事をする。と、同時に理生が手を離し、普通に隣を歩き始めた。
（今のは何だったの？　肩を抱くなんてこと、今まで一度もしなかったのに。もしかして理生ってば相当酔ってる……？）
寒さなど吹っ飛んでしまうくらいの衝撃である。
（きっとそう。だから私と結婚するだなんて、とんでもないことを言い出したのよね？）
小百合はドキドキしながら夜空を見上げた。冷え込みが厳しいせいか、都会の空にも星がいくつか輝いて見える。
「その時、婚約指輪、買いに行くから」
「え、あ、はい……？」

「小百合が好きな指輪買ってやるよ」
照れ臭そうに頭を掻きながら彼が言う。
小学校の時から変わらないそのクセを見て、小百合は苦笑した。
「買ってやるって言い方～」
「そうか、失礼だったな。ええと……買わせてください」
「それまでに理生の考えが変わってなければ、ね」
やはり酔っているのだろう。明日になれば理生はきっと忘れている。小百合も彼の言葉を本気になどしていなかった。
ここまで考えた時、ふと思い出す。
先月の話だ。
婚活相手と付き合い始めた十一月初旬。ちょうど小百合の誕生日だったのだが、その彼は何も言ってこなかった。婚活で互いのプロフィールはわかっていたのに、である。それを知った理生が気を遣い、以前に約束していたテーマパークへ誘ってくれたのだ。
落ち込んでいた小百合に、理生がかけてくれた言葉が――
「理生、テーマパークに出かけた時に冗談言ったでしょ？　律儀にその約束を守らなきゃって思ってるんじゃないの？」
「クリスマス前に小百合がフラれたら一緒にいる。それでひとりになった小百合を俺が

もらってやるって話？」
「そう！」
「お前さぁ……それ、マジで忘れてただろ？」
はぁ～、と理生が大げさにため息を吐いた。
「だってあれは、私を慰めてくれようとした冗談の言葉でしょ？」
「本気だって言ったよ」
「え……、そうだったっけ……？」
言われた記憶がないので首をかしげると、彼は体を傾けて顔を覗き込んできた。
「寺島小百合って、良くない？」
「寺島小百合……、まぁ悪くはないんじゃない？」
「語呂はいいな」
「こういうの語呂って言う？」
「あははっ、わからん」
「理生ったら」
理生が笑い、何だか小百合もおかしくなって、一緒に笑う。
美味しい料理と美味しいお酒。素敵な空間と、理生との会話。それらを満喫した小百合は、すっかりいつもどおりの元気な自分に戻ったことを、真冬の夜の中で実感していた。

翌日の午後。

今日は休日なので小百合はひとり暮らしの部屋のベッドで、ゴロゴロしながらスマホの画面を眺めていた。

昨夜は飲みすぎた気がしたのだが、どこも何ともない。良い酒は美味しいだけでなく、悪酔いにすらならないのだ。

（今さらこんな時期にクリスマスの予約なんてやっぱり取れないな……。どうしよう、近所のパスタ屋さんですら予約でいっぱいだわ）

せっかく理生にごちそうできると思ったのに、これでは約束を果たせそうにない。

彼は仕事が忙しく、普段はそれほど頻繁に会えないのだが、小百合に悩みができると必ず駆けつけてくれる。美味しいものがあるところや楽しい場所に連れていってくれて、小百合の気が紛れた頃に解散する。それらの支払いを、いつも知らない間に理生が済ませてしまうのだ。

（理生がいいと言ってくれても甘えてばかりは申し訳なさすぎる。私の財力では豪華なところは無理だけど、美味しそうなお店を探そう）

その後、しばらくSNSで探しまくっていると、良さそうなお店が見つかった。

「新しいもつ焼き屋さんだ。何これ、席にハイボールのサーバーがついてるの？　飲み放題ってこと？」

ワクワクしながら情報をチェックする。予約も取れそうだ。クリスマスにもつ焼き……、まぁカップルでもないのだしいいか、と思った時。

――二十四日どう？　俺が店取ろうか？

理生からのメッセージがスマホに届く。

――新宿にあるもつ焼き屋さんの予約が取れそうなの。七時に予約入れちゃってもいい？

――いいね、ありがとう。じゃあ待ち合わせは五時に銀座で。小百合、早番の日だよな。間に合うか？

「銀座？　何でだろう？」

――間に合うけど、銀座に何の用なの？

――買い物だよ。そのあと、もつ焼き屋に間に合うようにするから大丈夫。不都合があったらメッセージして。

そこで会話は途切れた。仕事なのか会食なのかわからないが、理生は忙しそうだ。

「まさか本当に指輪を買いに行くつもり？　……なわけないか」

突然浮上した結婚話が本気だとは思えない。

「理生は酔ってたし、今も結婚話は出ていない。次に会った時はいつもどおりの関係に

戻ってるでしょ」

ぶつぶつ言いながら店の予約をする。何を着ていこうか、などと小百合は呑気に考えていた。

そしてクリスマスイブの土曜日。

小百合は音楽教室のカウンターで受付業務に励んでいた。早上がりの日なので、理生と待ち合わせの時間には余裕で間に合いそうだ。

「こんにちはー」

受付前に来た若い女性に挨拶をすると、彼女が申し訳なさそうな顔をする。

「あっ、こんにちは。ギターレッスンに来たんですけど、吉田先生、もういらしてますよね？　ちょっと遅れちゃって……。私、高橋といいます」

「高橋さまですね。五分遅れなので、まだキャンセルにはなりません。どうぞ教室に向かってください。今、高橋さまがいらしたことを吉田先生にお伝えしますね」

言いながら、手元にある電話の受話器を取って内線の番号を押した。

「ありがとうございます、行ってきます！」

「頑張ってくださいね～」

笑顔で生徒を見送る。

『はい、吉田です』

教室にいる講師に繋がったので、生徒が到着したことを伝え、内線を切った。パソコンの画面をチェックしながら小百合は思う。

（あぁ、赤ちゃんや小さい子どもを連れたママたちに会いたい。今日は土曜日だから、小学生以上の生徒さんと大人が主要な教室だ。もちろん大きな生徒さんもありがたいし、どんどん来てほしいんだけどね）

平日の午前と、午後の早い時間は幼児を連れたママたちで賑わうため、子ども好きな小百合にとって至福のひとときだった。

可愛い子どもとお母さんの組み合わせを見ていると、イヤなことなどすべて忘れて、ほのぼのした気持ちになれる。

大きなショッピングモールの一角にある楽器店に併設された音楽教室。小百合はそこの音楽教室の受付と事務、そして親子で楽しめる音楽教室の講師をしていた。

ピアノを得意としていたので音大に進んだのだが、幼児向けの音楽教育に触れる機会があり、そこで子どもの可愛さに目覚めてしまったのだ。

……赤ちゃんは可愛い。子どもたちも可愛すぎる。ママとセットだと、なお素晴らしく可愛い。

大学卒業後に保育士になることも考えたが、音楽教室に募集があると知り飛びついた。

新卒で入ってから今まで楽しく働き、早六年目。まだまだ続けたいと思っている。

午後四時過ぎに、小百合は退社した。身支度に時間がかかり、結局、待ち合わせにギリギリの時刻となってしまった。

街はクリスマスイブの賑わいだ。そこかしこからクリスマスソングが聞こえ、イルミネーションが美しく煌(きら)めき、行き交う人々を笑顔にさせている。フラれてから間もない小百合も、今夜は冬の寒さを感じないほどに心が弾んでいた。

（理生のおかげで寂しく過ごさなくて済んだから？　街の雰囲気が心から楽しく感じられる。彼に感謝しないとね）

待ち合わせ場所のコーヒーショップへ向かうと、小百合から連絡を受けた理生が店の前に立っていた。

こちらに気づいた彼が手を振る。周りの女性たちが、一斉に小百合のほうを見た。こんなイケメンと待ち合わせているのはどんな人なのかと、興味があるのだろう。

慣れっことはいえ、視線が痛い。

「お待たせ。ごめん、遅れちゃったね」

「いや少しだけだろ、大丈夫だよ。予約入れてあるから行こうぜ」

爽やかな笑顔で答える理生は、すぐにその場を離れようと歩き出す。彼についていき

ながら、小百合は質問した。

「わざわざ銀座に来て、何の買い物するの？」

尋ねた瞬間、理生が立ち止まり、小百合を見下ろした。

「天然か？　婚約指輪を買いに行くんだろ？」

「は、え？　ちょっ、は？」

「急ごう。ほら」

小百合の手を理生が掴(つか)む。大きな温かい手に包まれて、心臓が大きな音を立てた。

「あ、あの……」

「何だよ？」

戸惑(とまど)う小百合の反応がおかしなものであるかのように、彼は首をかしげる。

「べ、別に」

先日、肩を抱かれた時と同じく、小百合は何でもないという顔をしてしまった。

（今さらどんな顔をしたらいいわけ？　ずっと友だちだったのに、この接近の仕方は何なの？　ていうか、婚約指輪？）

ぐいぐいと理生に引っ張られて、ジュエリーショップへ半(なか)ば強引に連れていかれる。

「このお店なの？」

「お気に召さない？」

「お気に召すも何も、こんなすごいブランドの指輪なんてダメよ。……いや、そうじゃなくて婚約指輪なんて本気で言ってるの？」
有名人御用達のブランドだ。女性誌やネットなどでも憧れの店として常に話題になっている。
「本気に決まってるだろ。俺たちは結婚する。だから婚約指輪を買いに来た。お前こそ、今さらどういうつもりだよ」
入り口でひとり焦る小百合に、理生が真面目な顔で言った。
「ええと、まさか理生が本気だとは思わなくて」
「いいから入るぞ。予約の時間、一分過ぎた」
「うっ……わかった。迷惑になっちゃうものね」
「そういうこと」
これ以上ここで立ち止まっていれば、お店に迷惑がかかる。仕方なく小百合は理生と共に店内に入った。
ただならぬラグジュアリーな空間に小百合はいたたまれなくなる。
個室に通され、カタログを見始めるとふたりきりになったので、小百合はささっと指輪を指定した。とにかく一番安いものをと考えたのだが、理生に却下される。
「何でろくに見もせず決めるんだよ。遠慮して安いもの選んでるだろ？」

「いやあの、これで十分すぎるってば」
一番安くても、小百合のような一般人にとっては手が届かない値段だ。
「ダメ。俺の立場も考えてくれ」
「……じゃあ、理生が選んでよ」
ぼそりと言ったところで男性スタッフが入ってきて、温かな飲み物を用意する。
「すみません、お願いしたいんですが」
「お決まりでしょうか？」
理生が声をかけると、男性はにこやかに答えた。
「値段が表示されていないカタログはありますか？」
「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」
ハッとした顔に変わった男性はお辞儀をし、すぐさま部屋を出た。
「えっ、ちょっと、何それ」
「値段が見えなければ気にせず選べるだろ？」
「余計に選べないわよ……！」
「いいから、選んで」
揉めている間に店員が戻ってくる。先ほど見ていたものよりも大きなタブレットにジュエリーが表示された。もちろん値段は……ない。

「後悔しても知らないからね？」
「俺を見くびってもらっちゃ困るな」
ふふん、と笑った理生が、小百合の手をぎゅっと握った。思わず体がビクンとなり、顔が一気に火照る。
（何考えてるのよ。と言っても、ここに来るカップルはラブラブなんだから拒否するのも変か……。さっきも手を繋いでたけど、理生の温もりが直に伝わることが、こんなにも恥ずかしいだなんて……。ああ～どういう顔したらいいんだろう。この前、肩を抱かれた時からそればっかり……！）
混乱する状況の中、どうにか指輪を選び終えた。

もつ焼きの店に移動しても、小百合は少ししか食べられず、頭の中は今後のことでいっぱいだ。
そんな小百合の思いなどつゆ知らず、理生は呑気な発言を重ねていく。
「年末年始、お互いの実家に挨拶に行こう。どっちを先にする？」
「あの、本当に本気の、本気なのよね？」
「往生際が悪いなぁ。やめたいなら、納得できる明確な理由を教えてくれよ」
指摘されて考えるものの、断る理由が思い浮かばない。条件が良すぎるのだ。

考えてもみなかった相手だが、灯台下暗しとはこういうことだろう。
「……特にありません」
理生は完璧に小百合の条件にマッチしているのだから、こう答えるしかなかった。
「だよな？　じゃあ次は式場の予約。俺はよくわからないから、小百合の好きな会場にしていいよ。誰を呼ぶかなぁ……。こういう時、お互いの友人が共通なのは便利だな」
「そうだけど……」
「小百合」
隣に座る彼がこちらに向き直り、小百合を真っ直ぐ見つめる。
「な、何？」
ドキリとさせられながら、小百合は返事をした。
「どうせならこの結婚、楽しもうぜ。小百合にとって結婚は、恋だの愛だのは関係ないんだろ？　俺といてラクだという利点を目いっぱい利用すればいいよ」
優しく微笑む理生の表情を見て、胸が痛くなる。
長年の付き合いから、理生が嘘を吐かない人間だとは知っていた。彼は小百合のために本気で「利用しろ」と言ってくれているのだ。
小百合も背筋を伸ばし、彼のほうへ姿勢を正す。
「理生も私のことを利用してね。私、理生には友人として、心から幸せになってほしかっ

たのよ。理生が私との結婚によって人生にいろいろと都合がいいのなら、どんどん利用してほしい。それで理生が幸せになるなら、私も嬉しいから」

「……ありがとう。俺も、小百合には幸せになってほしいよ。誰よりも、そう思ってる」

理生の表情が曇ったような気がしたが、それは一瞬だった。

とにかく、突然のことではあるが、彼との結婚が現実的になったのだ。

理生の心意気を見せられた小百合は、自分も腹をくくって頭を下げる。

「これから、よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく」

お互いハイボールのグラスを掲げて、数回目の乾杯をした。

飲んだ割にまったく酔えなかった小百合は、マンションの部屋に戻ってすぐにシャワーを浴びた。

（子どもがたくさん欲しいという私の願望も、これで安泰か……）

ふと、当然のことに気づいて声を上げる。

「――の前に、子づくりよね!?」

結婚して子どもを授かるには、つくらなければならない。理生との「それ」を想像することなど思いも寄らないほど、幼馴染という関係に慣れきっていた。

「理生と子づくりなんて、できるのかな私」

ちょっと想像するだけで、恥ずかしさに顔が熱くなる。

自分の体を見つめたが、あれこれ考えると前に進めなくなりそうなので、ひとまず洗うことに専念した。

◆◆◆

寺島理生、二十八歳。今日は人生最大の幸せな日である。

三月下旬の日曜日。東京では桜が満開を迎え、柔らかな日差しが春を告げていた。

チャペルでの挙式を無事に済ませた理生と小百合は、披露宴前に式場の中庭で写真撮影をしている。ここも桜が咲き、美しく手入れをされた緑の間から可愛らしい春の花々が顔を覗かせていた。

カメラマンの声がかかる中、幸せなポーズで写真を撮る。桜の下での撮影を終え、ベンチへ移動する際に理生はふと、我に返った。

（マジで小百合と結婚できたんだな、俺。これって本当に夢じゃないよな？）

理生は自分の頬をつねってみる。古典的な確認方法である。

「いでっ！」

「どうしたの？」
純白のドレスに身を包んだ小百合が、心配そうにこちらを見上げた。
「い、いや別に……」
「ほっぺ赤くなってるよ？　ちょっと見せて」
小百合が理生の頬に手を伸ばす。
何と美しい花嫁だろう。
彼女の体に沿ったラインのドレスは裾が綺麗に広がり、背中が大きく開いている。マーメイドと呼ばれるウェディングドレスらしい。背が高く、細身の小百合を引き立てる素晴らしいデザインだ。
新芽の淡い緑の中で、小百合の姿が眩しく輝いている。あまりにも綺麗で、なかなか正視できないくらいだ。
その背中に触れたい、肩を抱きしめたいという欲望を抑えつつ、返事をした。
「何でもないって」
頬に触れてきた小百合の手を握り、カメラマンの指示に従って歩く。
「ちょっとそれ、虫さされじゃないよね？　かゆくない？」
まだ心配している彼女の声が可愛くて、繋いだ手を強く握った。
「違う違う、間違えてひっかいただけ」

「ならいいけど……、写真に残らないかな？」
「少し触っただけだから、すぐに治るよ」
苦笑した理生は小百合と共にベンチに座る。
（マジでつねりすぎたわ。いくら夢みたいだからって、バカすぎるな俺）
小百合と結婚できたことが夢のよう……
そう思ってしまうのは、理生がここ二年ほど彼女に片思いをしていたからだ。
幼馴染のふたりは、お互い気の合う友人として付き合ってきた。
それがいつの間にか、理生の中にだけ違う感情が生まれていたのだ。
小百合と話すのは気楽で、素の自分が出せる。食事も遊びに行くのも、メッセージアプリで他愛ない会話をするのも楽しい。小百合と出かけたい。小百合に会いたい。いつまでも一緒にいたい――。そこまで思った時、理生は小百合をひとりの女性として好きなのだと気づく。
自覚した瞬間、パニックに陥りそうになった。
二十年も前から知っていて、恋愛感情など湧くはずがないと思い込んでいた相手に恋をしたのだから、自分の感情を持て余すのも無理はない。
それが今から二年前のこと。
当時、理生には恋人がいなかったが、小百合にはいた。婚活する前の彼氏だ。小百合

と会うと、その彼氏との悩みやノロケなどを聞かされたが、理生は耐えた。小百合のためなら、どんな話も受け入れたい、少しでも彼女の悩みが和らげばいい、と思い込むことにした。

心の内では嫉妬にまみれ、ふたりの仲を引き裂いてやりたいという悪意に満ちあふれていたが、そんな素振りは一切見せずに小百合と会った。時々、そんな奴とは別れればいいというアドバイスを交えながら――

実際、小百合が別れた時には「それで良かったんじゃないか」などと、素知らぬ顔で言った。小百合は「そうだよね……」と泣きそうな笑顔で答えた。

そして、弱っている彼女に迫るわけにはいかず、ただ遊びに連れていき、美味しい食事をするためだけに会うことにする。「俺にしておけよ」と言いそうになったことは数え切れないほどあったが、そのセリフは小百合の心の傷がすっかり癒えてから伝えようと決めていた。

そんなふうにグズグズしていると、小百合はいつの間にか婚活を始め、相手を見つけたと言うのだから、理生の血の気が引いたのは言うまでもない。

幸い、その相手とは上手くいかないだろうという予想が的中する。すぐさま理生は、このチャンスを逃すまいとプロポーズをしたのだ。

少々強引だったが、彼女もまんざらでもないように見えたので、結婚話をどんどん進

めて今日に至ることができた。

互いの母親は自分たちが幼稚園の頃からのママ友であり今でも仲が良いため、この結婚には大賛成だ。また、父親同士も交流があり、そちらの反対もない。理生にとって環境も好都合なのだ。

理生の父は結婚相手は自分で決めろと前々から言っていて、小百合に告げた「親が結婚をせっついている」というのは、とっさに吐いた嘘だ。あのチャンスをどうしてもモノにしたかった。

（念願の小百合との結婚が叶った。縁結びの神社、マジで効くな。結婚式は教会だったけどそれは置いておいて、とにかく神様ありがとうございます！）

心の内の喜びのままに小百合を抱き上げ、お姫様抱っこをした。

「きゃっ……！　び、びっくりした……！」

小さく叫んだ小百合の顔が間近にある。

「いいですね！　どうぞ見つめ合ってください。新婦さまは、新郎さまの首にお手を回していただけると素敵ですよ！」

カメラマンに言われたとおり、彼女と視線を合わせた。恥ずかしそうに頬を染めた小百合が、おずおずと理生の首に手を回す。

ニヤリと笑いかけると、彼女は口を引き結んで羞恥に耐えていた。

煽(あお)っているのかと誤解しそうな、小百合のそそる表情。反射的に疼(うず)きそうになるのを鎮めて、平静を保った。

「……恥ずかしすぎるんだけど」

小百合が蚊(か)の鳴くような声でつぶやく。

「楽しむんだろ？　この結婚を」

「そ、そうだったわね」

理生に言われて思い出したのか、彼女は慌てて笑みを作り、こちらを見つめる。

（小百合、綺麗だ……。今日から俺の妻、奥さん、家内、あと何だっけ……？　まぁいい。とにかく彼女と夫婦になった。仕事から帰れば、毎日家に小百合がいる。想像するだけで鼻血が出そうだ……）

カメラマンに写真を撮られながら、理生は心の中で悶(もだ)えていた。

（とはいえ、俺が片思いしているという事実は変わらない。小百合は『恋だの愛だのはもう面倒臭い』と言っていたんだ。だからまだ告白はできない。俺が好きだと伝えたら、すぐに逃げられてしまいそうだしな。それだけはイヤだ……！）

小百合を支える手に一層力が入る。

「ねえ」

「……」

「理生ったら、ねえ」

「あっ、何？」

怪訝(けげん)な顔をして小百合がこちらを見ている。理生の首に回されていた彼女の手は、とっくに外れていた。

「カメラマンさん、あっちに移動してって言ってるよ？　重いでしょ、下ろして」

「あ、ああ、うん。……いや、このまま移動するわ」

「へっ？」

戸惑う小百合をよそに、理生はお姫様抱っこをしたまま歩き始めた。

「……離したくない」

「え？　何か言った？」

「いや、何も」

小百合を離したくない。絶対に逃したくない。

だが、いつかこの想いを知ってもらえる時は来るのだろうか……

（何を弱気になってるんだ。俺は小百合を幸せにする。そして、男として振り向いてもらえるように努力していく。プロポーズした日にそう決めたんだ）

次の撮影場所に移り、理生は日の当たる芝生(しばふ)に彼女をそっと下ろした。

「――お前らは、こうなると思ってたよ」
「俺は意外だったな。幼馴染と結婚って珍しいんじゃない？」
披露宴会場に招待した友人らが、着席する新郎新婦の周りを囲んだ。
小学生からの付き合いと、大学時代からの友人たちだ。どちらも理生と小百合の共通の友だちである。
「私はいいと思うよ～！　幼馴染と結婚なんて理想よね」
「おっ、じゃあ俺と結婚するか？　独身同士ちょうどいいじゃん」
「いや、マジで無理。彼氏いるし」
昔からの気の置けない友人同士、冗談もあけすけな物言いも笑い飛ばしている様子が相変わらずだ。
「それにしても、背の高いふたりが並んでると迫力あるよな。座ってるとわからないけど」
友人のひとりが言うのと同時に、小百合の表情が曇った。たぶん、一瞬のそれに気づいたのは理生だけだろう。なぜなら彼女がすぐに笑顔で言い返したからだ。
「でしょ？　変な人に絡まれなくて済むから便利だよ」
「知らない奴が見たら一瞬ひるむよなぁ」
笑いながら友人が続けたが、いくら悪気がなくても小百合は気にしたに違いない。今の言葉のせいで心の内にモヤモヤが生まれたはずだ。少なくとも理生は今、モヤモヤしている。

「モデルみたいだろ？　羨ましいなら素直にそう言えよ」
理生は小百合の肩を抱き、友人に向けて笑顔を見せた。表情は優しいが、語気の強さで理生の不愉快さを友人は感じ取ったようだ。
「あ、はい、羨ましいです、すみません」
「バカねえ、最初からそう言えばいいのに。空気読めない発言しないの」
謝る友人を、小百合の親友である乾由香子が肘で小突いた。由香子の言葉に周りからも同意が起き、雰囲気が良いほうへ変わったことに理生はホッとする。
「そういえば、小百合は結婚したらたくさん子どもが欲しいって言ってたよね？　もしかして今でもそうなの？」
「えっ、うん、まぁそうかな」
由香子の質問に小百合が答えると、「きゃー」とか、「うおお」などの声が上がった。
「何かもう、こっちが恥ずかしくなってきちゃうよ。仲が良くて羨ましい！」
「理生、頑張れよ！　十人くらい、いってしまえ」
こちらは理生の親友、追分知久だ。
彼にバーンと背中を叩かれて、持っていたシャンパンのグラスを落としそうになる。知久の顔を見つめながら、理生は口角を上げた。

「当然だろ。つくりまくってやる」
再びみんなの悲鳴が上がったのでチラリと小百合の顔を見ると、彼女は真っ赤になってアワアワしていた。
（俺は本気で子どもをつくりまくろうと思ってはいるが……。今さら小百合がイヤがるなんてことはないよな？　子どもが欲しいってことで結婚したんだから、当然、俺とつくる気でいるんだよな？）
急な不安に襲われたが、友人らと冗談を言い合っているうちに薄れていく。
歓談メインの披露宴は友人や親戚ら、お互いの職場の上司や同僚を呼んでいた。
理生のほうは父の希望で、理生直属の上司と同僚だけだ。堅苦しい雰囲気にさせまいという父の気遣いだった。
一方で小百合は、音楽教室の同僚と講師仲間を呼んでいる。
「八雲先生……じゃなかった、今日から寺島先生ですね。ご結婚おめでとうございます」
「ありがとうございます、吉田先生」
小百合に近づいた男性が彼女と挨拶を交わしている。
「吉田先生」と呼ばれた男性は爽やかな風貌のイケメンだ。妙に気にかかるので、理生もさりげなく吉田のほうを向く。
「先生のこと、僕は密かに狙ってたんですけどね～」

「お気遣い、痛み入ります」
小百合がさらりと吉田の言葉を躱す。理生は心の中で「いいぞ、小百合」とつぶやいた。
「お気遣いじゃなくて……まぁ、いいです。お祝いの席ですしね。余計なことを言うのはやめましょう」
苦笑した吉田が、チラリと理生を見る。微笑んでいても目の奥は笑っていない。
「さすが八雲……じゃなくて、寺島先生が選んだ素敵な旦那さまですね。ギターに興味がおありでしたら、ぜひ僕のところへいらしてください」
「ギターを教えていらっしゃるんですか。ぜひそのうち、お願いします」
理生は余裕の笑みを吉田に返して、牽制した。
こいつは危ない。小百合に近づけてはダメだと本能が警鐘を鳴らす。
では、と去っていく吉田の背中を見ながら、理生は小百合に耳打ちした。
「すっげぇイケメンの先生じゃん」
「女性に一番人気の講師なのよ。結構有名なバンドのライブツアーに参加したり、自分の動画サイトの登録者も十万人以上いるみたい。もちろんギターの腕前も抜群」
「……ふうん」
「理生、ギター習いたいの？」
人の気も知らないで、小百合はトンチンカンな質問をしてきた。首をかしげる仕草が

可愛すぎて困る。
「……別に」
「別にって、変な答え」
「まぁまぁ興味あるから習うかもしれないし、習わないかもしれないってこと」
「じゃあ、その気になったら言ってね。私が紹介するから」
「ああ、頼むよ」
小百合は理生がギターを習うなんて意外、などと呑気に笑っていた。
ギターなんぞ一ミリも興味はないが、彼女に近い男は気にかかる。
（小百合の様子からして心配はなさそうだが……。ああいう、いかにもチャラいモテ男は警戒したほうがいい）
理生は小百合に気づかれないよう小さく息を吐いて、気持ちを落ち着かせた。

披露宴後、みんなで写真を撮り、親戚や両親たちと挨拶をし、友人たちと語り合う。二次会は行わないので、その場で解散となった。
理生と小百合は着替えをしたあと、宿泊先のホテルへ移動する。両親や親戚は都内在住のため、友人らと同じく帰宅した。
ホテルのロビーで軽食をとり、少し休んでから部屋に入る。理生の希望したスイートルームだ。

「綺麗ね～！　東京の夜景が一望できる……！」
部屋について早々、窓辺に駆け寄った小百合が感嘆の声を上げた。だいぶ昼が長くなったとはいえ、まだ春先だ。空はすっかり夜の群青に変わり、ビル群やタワーなどの明かりが街を煌めかせていた。
「気に入った？」
「こんなに素敵なところ、気に入らない人なんているの？」
無邪気な笑顔で小百合が振り向く。
「それなら嬉しいよ」
このまま抱きしめたい衝動に駆られながら、理生は笑顔でうなずいた。
「慣れないヒール履いたから、ふくらはぎがパンパン」
「風呂のお湯、溜めてくる。先に入って脚を癒やせばいい」
「ありがとう。寝る前に脚にジェルシート貼ろうっと」
「持ってきたのか？」
「ジェルシートは私だけなんだけど、理生用に背中とか腰の湿布を持ってきたよ。疲れたでしょう？」
ソファに座った小百合がバッグをゴソゴソと探り始めた。心配性な彼女らしいのだが、

思わずため息が出る。
「お前なぁ……、俺のことどれだけオッサンだと思ってんだよ、同い年だろ」
「あはは、ごめん、ごめん。必要な時はあげるから言ってね」
「ハイハイ、ありがとうな」
背中に湿布を貼って初夜を過ごすのかよ、と心の内で呆れながら、理生はバスルームに向かった。
バスタブの横には窓があり、ここからも夜景が見える。大画面のテレビもついていた。
理生はバスタブに溜まっていく湯を見つめながら、悶々と考える。
（あいつまさか、ああ疲れたおやすみなさい～って、そのまま寝る気じゃないだろうな？）
友人らに子どもの人数について聞かれた時、小百合の顔は赤くなっていた。その様子から、今夜について期待していたのだが……
（いや、有り得る。この二年間、俺の気持ちにまったく気づかないほどの鈍感さだったんだ。小百合は男女の機微に疎すぎる。俺がヤル気に満ちているのもわかっていなそうだ。ということは、もしかしてすでに寝てるかもしれない!?）
理生はバスルームを飛び出し、リビングに駆け足で戻る。
「どうしたの？」
「べ、別に」

小百合はソファに座っており、焦る理生を見つめた。
「急ぎの仕事でも思い出した？」
「ああ、そう、そうなんだよ」
「大変よね。あ、お風呂のお湯、ありがとう」
「……どういたしまして」
返事をした手前、見たくもないノートパソコンをひらくハメになる。仕方なく、小百合がお風呂に入っている間、新商品開発についての資料を確認した。
理生は父が経営する「テラシマ・ベイビー株式会社」の営業部で働いている。いずれ会社を継ぐ彼は営業だけではなく、全体について把握をしていなければならない。数年以内に、父を補佐する立場になりそうなのだ。
この時代、いつ経営が傾いてもおかしくはない。二代目などという甘えに乗っかっていてはすぐに足元をすくわれる。
そんなふうに常に気を張っている理生にとって、唯一の癒やしが小百合だったのは言うまでもなかった。
しばらく仕事をしていると小百合が部屋に戻ってくる。
「お先に、ありがとう」
「ああ、じゃあ俺も入ってくる」

「ごゆっくり」
ニコッと微笑んだ小百合の体から、ボディソープの香りが漂う。瞬間的に本能が頭をもたげたが、ここで焦る必要はない。時間はたっぷりあるのだ。
バスルームに入り、湯船に浸かる。彼女が浸かったお湯……などと、中学生じみた妄想をして興奮している場合ではない。
（このあとどう攻めようか。あの様子じゃ強引に迫らないと、いつまで経っても小百合がその気にならなそうだ。でもそれで嫌われたら、生きていけない）
湯の中で真剣に考える。心の内だけでは留まらず、いつの間にかぶつぶつとひとりごとを言っていた。
「強引に迫ってから、うんと優しいモードでいこう。しかし今さら照れるな、そういうのも」
しかし照れていたら前には進めない。
今夜、必ず小百合を抱く。
理生は手をグッと握りしめ、窓から見える夜景に誓った。

◇　◇　◇

バスローブを羽織って出てきた理生を、小百合は正視できなかった。
（私もバスローブを着てるけど、この雰囲気はいかにも『これからやることやります』って感じよね。……ドキドキしてきた）
「何か飲んでる？」
尋ねられて顔を上げると、髪が濡れて妙に色っぽい理生がソファに座る小百合を見下ろしていた。
「えっ、あ……、お水飲んでるよ」
「シャンパン開けようぜ」
「ちょっ、高いんじゃないの？　このお部屋だって――」
「これはサービスのシャンパンだから大丈夫。今日一日、お疲れさまってことで乾杯しよう」
明るく笑った理生が、テーブルの上で冷やされているシャンパンを手にした。栓を抜く手際の良さが様になっている。
ふたりはシャンパングラスで乾杯をした。
「ん、美味しいね……！」
「美味いな」
ふう、と息を吐いた理生がソファに背を預けてくつろぐ。

バスローブだけだと、彼のスタイルの良さが如実にわかる。小百合はこのあとのことをまた考え始めた。

（……いやいや、結婚式当日は『疲れてるからしない』カップルが大半だって話だし、私たちもそうに決まってるわよ、きっと）

そう思って、心も体も準備はできていない。新居に帰ってゆっくりしてから初夜……というのが小百合の認識だ。

シャンパンを飲みつつ、挙式や披露宴についてしゃべり出す。小百合には理生に伝えなければいけないことがあった。

「理生、さっきはありがとう」

「ん？　何が？」

「披露宴でみんながそばに来た時、理生はそんなつもりなかったかもしれないけど、庇ってくれたでしょ？　私たちが並ぶと迫力があるって言われて、ちょっとイヤだったの。だから理生の言葉に救われた」

ヒールを履いたせいで余計に大きく見えたのは仕方がない。そう思いつつ、傷ついた小百合の心は、とっさに繋いでくれた理生の言葉により、軽傷で済んだのだ。

「ああ、あいつな。縁切ってやろうかと思った」

「悪気はないのよ。私が身長を気にしてるなんて知らないんだろうし」

立ち読みサンプル
はここまで

笑って見せたが、理生は不快感をあらわにしている。優しい彼のことだから、小百合の気持ちを慮ってくれているのだろう。

「悪気がないのが、一番タチが悪い」

「ありがと」

小百合は苦笑してシャンパンをもうひとくち飲んだ。柔らかな炭酸と果実の甘みを味わう。

「理生って優しいよね。いつも助けられちゃってる。でも、私には気を遣わなくていいからね」

「私にはって？」

「理生はみんなに優しいでしょ？　誰にでも優しくできるって素晴らしいことだし、尊敬してる。でもいつもそれじゃ疲れるだろうから、私にはそんなに優しくしなくていいってこと」

これからふたりの生活が始まるのだから余計な気遣いは無用、という意味だったのだが、理生があからさまに不満げな表情をした。

「誰にでも優しいわけじゃないんだけど？」

「そうなの？」

「……ったく、何にもわかってないんだな、マジで」